

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で
話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応
えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『フラッシュ・ボーイズ 10億分の1秒の男たち』

マイケル・ルイス 著 | 文藝春秋 2014、346pp.

本書は、2011年に公開された映画「マネーボール」の原作等と原著者を同じくし、ドキュメンタリーではあるが関係者らの物語として描くという、読みやすい構成が取られている。本書はまず、偏執的なまでにこだわり抜いた低遅延(情報を送り始めてから到着し始めるまでの時間が短い)の通信回線を敷設するという興味深いチャレンジから話が始まる。ここまではまだ、しかるべき健全なスピード競争の延長線上にある。本題は、物語の中心人物となる銀行員らが、日頃使っている株式売買システムの不可解な挙動に悩まされるところからである。取引画面に表示された売り注文に合うよう買い注文を出した瞬間、株価が高騰してほとんど取引が成立しないというような奇妙なトラブルが続発したのだ。彼らは調査の結果、その原因と市場を不公平に歪める不健全なからくりを見破った。何が不健全かを端的に表せば、それが、金融の仕組みに根ざした市場の先読み手法などではなく、金融取引用に構築されたコンピュータとネットワークが、スピードに関する要求に限界まで応えていった結果として生じた実装上の隙を突いていた点に尽きる。彼らは奇妙な対症療法を開発して一定の成果を収めた後、市場から同様の不公平を抜本的に閉め出すための本格的な戦いに移っていくことになる。

評／『彦根論叢』編集委員／梅津高朗

『データの見えざる手: ウエアラブルセンサが明かす人間・組織・社会の法則』

矢野和男 著 | 草思社 2014、256pp.

本書では、ビッグデータという単語が定着する以前から、後にそう呼ばれるようになるようなデータを収集し続けて分析して得た、興味深い知見が紹介されている。まず、著者らが専用のリストバンド型のセンサー端末を開発して、10年以上前から日中も就寝中も装着して集め続けデータから見いだした、人の動きに関する奇妙な法則が紹介されている。それは、人は、日によってやらなければならない事が異なり、それをどうこなすか、それ以外をどのように過ごすかをそれぞれ自由に決めているにも関わらず、センサーが腕の動きを検出した頻度のとある分布が、どの日を見ても一定になるというシンプルながら強力な法則だ。最近ではスマートウォッチや活動量計などで誰でも簡単に著者らの知見を試せるようになってきており、この知見は応用性が高い。続いて、組織としての業務効率改善の話が登場するが、ここでは、誰が誰といつどれだけの時間対面していたか、会話は活発になされたか等の情報を蓄積できる名札型のセンサーが活躍する。得られたデータから業務上での人間関係を可視化し、データに基づく効率的な改善策の策定に役立てた例が示されている。さらにはビッグデータ解析に存在する大きな壁と、著者らが見いだした壁を越える方法が紹介され、未来への展望で本書は締められている。

評／『彦根論叢』編集委員／梅津高朗

『ゼンテギ』

グレッグ・イーガン 著 | 早川書房 2015、560pp.

本書の原著者であるグレッグ・イーガンは、当代きってのハードSFの書き手である。例えば本書の前、2013年に日本語翻訳版が刊行された「白熱光」(早川書房刊)では、我々とは異なる環境に生じた文明が物理法則を発見していく過程の描写が多くのウェイトを占め、発見された物理法則が我々の知るどれに当たるかを読み解いていくという、マニアックな楽しみが提供されている。他にも、一昨年話題になった映画「楽園追放」にも登場する、「コンピュータ上にコピーした人格に当人の主観が継承されると見做せる」という設定についての様々な角度からの考察に基づく多くの著作が発表されている。その設定が単なるSF的なアイデアではなく、現実により得る話だと納得したい場合、著者の数々の作品に当たることをお勧めする。本書は、そこへと至る技術開発の最初の一步がテーマになっており、著者の他の作品と比較すると物語性が高く間口が広い。物語は、主人公が記者として訪れたイランで革命運動を目撃することから始まる。やがて彼が直面する大きな困難が、もう一人の主人公の目指す脳の働きをコンピュータ上に再現する研究とリンクしていく。主人公とは全く主張を別にする、ある登場人物が、結局、同じ結論に到達するという洞察もおもしろい。

評／『彦根論叢』編集委員／梅津高朗

『ハルロック』

西餅 著 | 講談社 2014-2015、全4巻

本書は、一言で言えば電子工作の啓蒙マンガである。電子工作のイメージは、この十年ほどの間に完全に変わって来ている。本書で主人公が最初に取り組むのは3分タイマーの作成で、これは、コンデンサと抵抗、トランジスタなどを組み合わせて実現できる古典的なお題だ。が、本書ではそのような回路は登場せず、代わりにいきなりデジタルプロセッサが登場する。今や、組み込み用の手のひらサイズのコンピュータが数百円ほどで手に入る。回路の設計は、目的達成のためにはどんなセンサーを付けて何を計測し、どんな動作や音や光として出力するデバイスを付けるかに注力すれば良い。それらの制御や複雑な処理はプログラムの形で書き、コンピュータに押しつける。パーツを選べばインターネットにデータを投げ込むことも可能だ。本書はマンガとして抜群におもしろい。それも、小手先の面白さだけではなく、作る事の楽しさを源泉として描かれているのが素晴らしい。作る物のアイデアがいちいち独創的だが、そう見えてきちんと作成可能なのである(実際に作成してから登場させているようである)。さらには、愛好家らの交流から流行のクラウドファンディングにも触れ、趣味を超えた一つの生き様としても描かれている。

評／『彦根論叢』編集委員／梅津高朗